

## 日中国交の二十年、 日台断交の二十年

なか  
じま  
みね  
お  
中 嶋 嶺 雄

(東京外国語大学教授)

今年の日中国交と日台断交、ともに二十年に当たる。この間に東欧やソ連の脱社会主義の動きが世界史を変え、脱社会主義と脱冷戦の二つの座標軸を中心に国際社会は大きく変動した。中国をめぐる国際関係、及び日中、日台関係にも大きな変化があった。

二十年前の日中国交正常化では台湾はいまにも消え去り、中国に呑み込まれるのではないかという見方が一般的だった。ところが今日逆に台湾の経済的、社会的活力が中国を追い抜き、台湾が中国を変えるという状況になってきている。台湾の一人当たりのGNPはまもなく一千万ドルになり、中国の平均三五〇ドルに較べて凡そ三十倍近い差が出ている。人口が中国の六十分の一の台湾が、中国より大きな貿易総額を達成している。つまり、台湾の物や金の方がアジア・太平洋地域、さらには全世界で中国よりも多く動いているのだ。

一人当たりのGNPのみならず外貨準備高は今や九百億米ドル近く、世界一である。この点でも中国の倍以上を保有している。日台貿易も日中貿易より大きいのである。昨年の日中貿易の総額は二百三十億米ドルだが、日台貿易では台湾と公的な関係を持たず日本は何の支援もしていないのに、まもなく三百億米ドルになる。日本は台湾から百億米ドル近い貿易黒字を稼いでおり、経済的には中国より台湾が重要だといえよう。人の往来も日中間より日台間が遥かに大きい。政治的、外交的には依然として日中関係の方が圧倒的に優先されているという非対称性にこそ問題がある。

日本がアジアの一員として現実主義に立つのなら、大成長した台湾を日中関係とのバランスの上で外交上どのように位置付けてゆくかが極めて重要な課題である。台湾は国際社会から孤立化させられたが、民間レ

トリエが建っていて、その間に小さな葡萄棚があった。台所も南に面していたが、ずい分、後まで土間で、その前の庭とも空き地ともつかない所に掘抜きの井戸があった。僕の人生の中で、始めてになる記憶の「出来事」の場所が、この井戸端だった。

井戸端には太い幹の無花果いちじくと桜があり、その向こうに桃の木が七、八本並んで、すぐに隣家となっていた。家の前の細い道は、人力車が、擦れ違つては通れない。道に沿つて幅三、四十センチの深くないが、奇麗な水が、近所の「さえき山」に向かつて水量も多く、嬌かに、田芹を靡靡かせて流れていた。泥鰌、目だか、口ぼそなんかいた。大雨が降つた後は、何処から逃げて来たのか、金魚や亀の子が泳いでいたりした。

この家は、港区の芝口で、鉄道省御用達の羅紗問屋を営んでいた。おやじの養父、僕の祖父、池部敏吉が別荘に建てたものを、おやじが貰い受けたものらしい。その頃のおやじは帝展で「特選」の賞を受け、徳富蘇峰先生の肝入りで国民新聞社に籍を置き、漫画も追い風に乗っていたようだが、金は、まだ貯つてはいな

つたと思う。僕が小学校高学年になつてからの話だが、銀行の頭取、重役なんて奴は、みんな首を吊つて死んでしまえとどなつていたのを覚えている。十五銀行の取り付け騒ぎに巻きこまれ、折角、貯めた金を根こそぎ使つた怨念おんねんの叫びだったようだ。この金を貰い受けた頃は、せつせと貯める苦勞をした揚句、銀行に盗られちまうんだつたら、絵描きにならず、金持ちの敏吉お翁さんの代を継いでおけば、ずい分と助かつただろうに、甚だ残念な話だ。

大地震に襲われた、九月一日午前十一時五十八分の数分前、僕は、奥の八畳間から居間に通じている八畳を通り抜ける途中だった。

おふくろが、浴衣の衣紋を抜き、鏡台に向かい洗い髪を、手拭いで拭いているのが目に入った。

池部良氏プロフィール

俳優。一九四一年「鯛魚」でデビュー。年配の読者の記憶に残る映画に「背い山脈」「暁の脱走」等がある。七〇年代からはその存在感を強い演技で持続している。

また、「風まかせの暦」「そよ風ときにはつむじ風」など多くの著作で広い読者層を持っている。

題字―筆者

ベルの国際交流の手段を活用し、国際社会でも大きく発展した事を無視は出来ない。このような状況の中で、私達の中国認識を転換する必要性が強まっている。これらの事実は二十年前には殆ど予想されなかったが、この現実をアジア全体に位置付け、国際情勢全体の中で強化する必要がある。

このような日中、日台関係の二十年間には様々な教訓があった筈である。そもそも日中国交正常化は田中内閣成立、ニクソン・ショック、米中接近の状況の中でバスに乗り遅れるな、というムードで雪崩のように中国に一方的に傾斜した事によって成り立った。むろん当時の米中接近、中ソ対立という要因があり、中国自身も日本との国交正常化を必要としていたが、ああいう形で台湾を切り捨てて良かったのかどうかには大きな問題が残った。アメリカは一九七九年に米中国交正常化を実現したが、そのために台湾関係法を制定し、米中関係を外交レベルでも法的に継続する措置をとった。しかし日本はそういう措置を一切取らずに中国に

なだれこんだ。これは日本の戦後政治・外交史にとっても大きな汚点であった。佐藤元首相が考えていた日中関係正常化のためのプログラムとも大きく異なっていたのである。佐藤政権は親台湾的な選択を行い、中国と敵対したと見られているが実は沖繩返還の後に、日中関係正常化のプログラムは慎重に準備されており、それは当時の施政方針演説や「保利書簡」の問題などの中にも現われている。台湾つまり、中華民国との関係をも考えつつ、国交を正常化しようという選択であった。しかも佐藤政権は一貫して日華関係を重視したので、後の田中政権は一挙に中国との関係を正常化出来たのであり、田中内閣の「それゆけ中国」といった方針がその後の日中関係を規定してきたといえよう。いわば拙速外交であった。

このような前提で問題点を振り返ると、この二十年間、日中関係には様々な問題が存在し、中国からの天皇訪中要請を日本の国内世論がすんなりと受け入れられないほどの日中関係をめぐる亀裂もある。それは、日

本政府が中国の意に沿う形で事を処理するのが日中関係の根本だという結果を多くの場合にもたらし、中国は隣の大國だから友好関係を損なってはいけないという配慮が余りにも優先し過ぎていたからではないか。

問題が起ると常に日本が低姿勢に徹し、過去の不幸な歴史への贖罪の意識も重なって、いわゆる「贖罪外交」を繰り返してきた。これで確かに当面の日中関係の摩擦を修復したが、真の意味での日本国民の納得は得られていなかった。表面的な外交上の友好関係が日中関係の国民的レベルでの結び付きを、むしろ損なってきたのである。そもそも日本は「対中国位敗け外交」と見られる姿勢をとってきたのであり、歴代の首相も次々に北京詣でをするという状況がこの傾向を助長してきたのである。

これらの問題を踏まえて、この二十年間を振り返ると、日中国交正常化が実現した一九七二年は中国では文化大革命のほとぼりがまだ冷め切らない頃で、その前年には林彪事件が起き、中国国内の政治状況は安定

していなかった。そうした中で毛沢東体制は末期的症状を帯び、一九七四年には鄧小平が復活して七五年前後から周恩来を中心とする「四つの現代化」政策、今日の改革・開放という鄧小平の政策に繋るような脱文革、または非毛沢東化の政策を取り始めたが、これに対する抵抗も中国国内では強かった。一九七六年一月の周恩来の死は、やがて第一次天安門事件を同年四月にもたらし、九月の毛沢東の死の後には華国鋒が権力を握り、四人組逮捕の北京政変が起きたのである。こんな状況で日中関係は安定する筈はなかったが、一九七八年末から鄧小平を中心にした現代化路線が中国内部で力を得て、同時に華国鋒体制が崩壊する過程で鄧小平来日という大きなセレモニーもあったのである。

鄧小平来日と前後して中越戦争が勃発し、中国はベトナム制裁を叫んだ。日本に対しては日中共同声明以来、反覇権と言っているながら自らベトナムに対して覇権國家としての姿勢を示したことは、とても日本国民の納得を得られなかった。

しかし、その中で日中経済関係が上向いたのも疑いのない事である。それは一九七八年の鄧小平来日前に日中平和友好条約が締結されたからであった。これは覇権条項入の条約で、中国がこのことにこだわったからである。同時に日本は当時のソ連を覇権主義と見なした中国の対ソ戦略が含まれている条約を締結すべきだったかどうか問題が残ったが、中国の条件を飲み、条約に覇権条項を入れた事が鄧小平来日に繋ったことはいうまでもない。

しかし、その後の日中関係も安定的ではなく、一九八二年夏に第一次教科書問題が起きた。「侵略」の事項をめぐって、中国側はまさに内政干渉に等しい姿勢を示した。この点は文化大革命の時に毛沢東路線を礼賛した日本のマスコミが依然として中国傾斜をしていたために、事態がより拡大されたが、例によって日本の低姿勢謝罪外交によって一応決着した。これで漸く日中関係が修復されたと思いきや、八四年には中曽根元首相の靖国神社参拝をめぐって、中国側が再び硬化し

た。これにはA級戦犯の問題も関係してこじれたが、この中で出てきたのが一九八六年夏の「新編日本史」をめぐる教科書問題に関連した藤尾正文相の発言である。藤尾氏は中国の内政干渉を批判する立場から論陣を張ったが、結局スケープゴートにされ、その年の秋、中曽根・趙紫陽会談で決着が付けられた。だが、多くの日本国民にある種の屈辱感や中国に対する反発を残したまま終わったのである。しかも、こうして政治決着がついたのに中国側は本心から納得したのではなかった。

「新編日本史」の全体的なトーンは従来の教科書とは異なつてある種の民族主義的歴史観に立ったものであったかも知れないが、我が国がどんな教科書を用いるかはまさに我が国の国内問題であり、中国がそこまで口出しすべき事柄ではなかった。しかしこの時にも謝罪・贖罪外交が行われた。これは翌八七年の京都の光華寮問題の裁判をめぐる日中摩擦にも深刻な影を投げた。中国側は八五年十月に胡耀邦総書記が日中関係の

四点の意見を表明しているが、この中のポイントは日中共同声明と日中平和友好条約に日本国民が忠実であるべきことを強調したことだった。しかしそれで政府レベルは拘束されても、決して日本人の言論や宗教の自由が拘束されはしないことである。それはまさに日本国憲法が規定しており、胡耀邦のような後に中国民主化運動を評価する立場の指導者でさえも、日本の自由主義国のあり方とその国民感情を十分に理解してはいなかった。翌八八年八月には竹下首相が訪中し、巨額の円借款を約束したが、謝罪して経済援助というパターンのくりかえしは、逆に中国が日本に対して非常に高姿勢で出ることを誘うことになる。そうした中で、八九年六月、例の天安門事件が起きた。天安門事件は中国に悲劇をもたらし、それを代償に東欧や旧ソ連の社会主義体制解体に繋るといふ歴史の起爆剤にはなったが、日中関係はこれで再び冷却化した。天安門事件はまさに中国自身が起こしたのであり、日中関係が冷えても日本にその責任はない。西側諸国は、この天安

門事件に見られる人権抑圧に対し、今日でも中国に厳しい態度をとっている。アメリカでは中国理解派と言われるブッシュ大統領でさえも李鵬首相の訪米では握手をしなかった。こういう状況にも拘らず、日本は九一年夏に海部首相が訪中し、それは江沢民来日に繋がったが、江沢民総書記は日本国民に何もアピール出来なかった。

このように日中関係の二十年を振り返ると、友好の掛け声にも拘らず、日本国民が様々な教訓を学び、今や日本の国民感情は冷え切ってしまった。あの日中国交正常化をもたらした時の熱気からは今日の事態は予想されなかった。流行の先走りか逆に日中関係を台無しにし、同時に中国の対日政策そのものが日本国民の反発を呼んでいるといえよう。こうした日中関係の教訓をどのように評価し、次の二十年を創っていくかが今日の大きな課題である。

他方、そうした日中関係の裏側にもう一つの座標軸として存在した日台関係をみてみよう。日本は台湾と

の関係を断絶したが、七五年四月の蒋介石の死は、彼が終戦の時、「以德報怨」という寛大な政策をとったことともあり、多くの日本国民に忸怩たる気持を残した。

台湾はどうなるのが懸念されたが、蔣経国總統が体制を引き継ぎ、その後八八年の死までの約十三年間、台湾政治での蔣経国時代を創った。蔣家一族の親子の権力継承は必ずしも正当化されるものではないが、蔣總統は台湾民衆からも支持され、しかも彼はその晩年に数多くの業績を挙げた。また、彼の時代のインフラストラクチャーの整備、経済基盤の強化がその後の台湾の経済発展を支えた。しかも八七年七月には中華民国の台湾移転以外、三八年間にわたった戒嚴令が解除された。

こうした蔣経国總統の柔軟路線を受け継いだのが今日の李登輝總統である。總統に就任し、国民代表大会での選挙の洗礼を経て現在に至る四年間の業績を振り返ると、台湾は李登輝總統の開明的な政策とステイツマンシップにより、さらに大きく躍進した。蔣経国總

統の死去した八八年当時は一人当たりのGNPが五千ドル前後だったが、今やその倍近くになり、これも大成長である。そして昨年春には憲法の臨時条項である「中国敵国条項」を廃棄し、暮には国民大会を開催して、永年の「法統問題」（大陸時代に選出された議員の席などがそのまま維持されていたこと）を解決するとともに、本年二月には、台湾民衆の心理を引き裂いていた「二・二八事件」（一九四七年に起った国民党による台湾民衆鎮圧事件）の総点検をはかるなど、政治改革、憲政改革、国民心理の統合にも踏み出し、複数政党制の導入による民主化へも大きく進路を開いた。今や「台湾経験が中国でも注目され、こうした二つの中国の対照的な歩みが今日の日中・日台関係を実際には位置付け、宿命付けている。

冒頭に述べたように日中国交の二十年は日台断交の二十年であった。そして今、日本人はこの二十年間の中国、台湾をめぐる日本の外交的な在り方を根本的に再検討する時期に立ち至っているといえよう。

# 左右 往往

## 集団結婚式

海野和雄

(政治評論家)

新体操の山崎浩子さんや女優の桜田淳子さんらが世界基督教統一神霊協会の韓国での集団合同結婚式に出る、ということをめぐるテレビや週刊誌が大騒ぎをしたが、統一協会としては思わぬところでPRになったということだろう。

原理運動というやや狂言的な面がある活動を見せたり、こどもが入信して家に戻ってこない、といって親たちが訴えたり、霊感商法でモノを売ったり……という世間を騒がせてきたいきさつはある。教祖の文鮮明師は米国での脱税事件で有罪判決を受けたり、日本での政治活動は勝共連合を通して自民、民社両党を中心に献金活動をしたり、宗教だけでなく、企業、政治……と幅広い動きをしている。最近ではソ連崩壊で、ロシアや北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)というかつて

の「敵対」国家群との関係も良好になっていくと聞く。変われば変わるものと感心しているところヘタレント有名人の集団結婚騒ぎである。この儀式は異様だが、この教団では昔から続けられていることで、かつてマスコミに取り上げられたこともしばしばあった。教祖に結婚相手の選定を一切委ねて家庭を築き上げるというもので、連帯を強めるには大いに役立つだろう。外部からみると、結婚という人生の一大事を他人に任せっ放しで、見ず知らずの人と一緒にいる、というのは非常識。よくも唯々諾々とそれも何百組という大合同結婚式に臨めるものだ、とあきれ返ってしまう。知りもしない人といきなりセックスをすることになるから人間としてのプライドや自覚はどうなっているの、と聞いてみたくもなる。宗教は恐いという結論になる。